

10月に入ってから、気温差が激しくなりました。風邪などひかないよう体調管理に気を付けましょうね。私たちが服装で寒さを調整するように、動物たちもそろそろ毛が生え変わり、冬支度をする季節です。これからは、植物の葉も紅に色づいてきます。日本の四季は素敵だなあと改めて感じます。

今回は、犬から人類史を読み解く『犬からみた人類史』大石高典・近藤祉秋・池田光穂編 勉誠出版 2019 についてご紹介したいと思います。人以外の観点から人類史を語る本はめずらしく、貴重なんですよ。

この本は、3部構成です。第1部「犬革命」では“吠える理由”や“縄文時代の犬”など犬の祖先や先史時代における、犬と人との繋がりを解説しています。第2部「犬と人の社会史」では、“八咫公と軍犬”や“犬種の合成”など人と犬の共生関係が前近代、近代にどのように引き継がれていくのかを考察しています。第3部「犬と人の未来学」では“犬と人の共存”など、犬と人の関係について現在から未来へ展望しています。各部にはコラムがあり、“南方熊楠による欧文学術誌上での犬の比較民俗学”の解説や、“イヌのアトピー性皮膚炎とそのケアのあり方”を考察していて、興味をそそられる内容となっています。

特に私がオススメしたいのは、第2部13章の「紀州犬における犬種の合成と衰退 日本犬とはなんだったのか」です。ここでは、近代から現代までの日本で犬種がいかに作られ、衰退していったかが、紀州犬を例に示されています。現在、日本では約890万頭の犬が飼育されています。さて、ジャパンケネルクラブ(JKC)という日本最大の愛犬団体に登録されている紀州犬は何頭いると思いますか？平成28年で1頭のみ、平成29年でも2頭です。日本犬(北海道犬・秋田犬・甲斐犬・紀州犬・四国犬・柴犬)を専門とする日本犬保存会でも、平成29年の紀州犬の発行血統書数は372頭です。1992年に約3600頭であったのに比べてみると、約1/10にまで減ってしまっているのです。現在、人気のある柴犬は、JKCの登録犬数が1万1829頭で1位のプードルの7万5149頭から差があるものの、5位の多さだそうです。秋田犬は287頭、甲斐犬は146頭、北海道犬は33頭、四国犬は23頭であることからみると、紀州犬の2頭というのはかなり少ないことが分かります。

そもそも紀州犬とは、和歌山・三重・奈良の県境付近に分布していた在来犬が、固定されてできた犬種のことです。明治維新後に、洋犬が多く流入し、絶滅・雑種化の危機にさらされていたことから、昭和9年5月1日に天然記念物に指定され、紀州犬審査会が行われます。ちなみに、第1回目の合格犬12匹の写真も載っています。紀州犬といえば、白色のイメージですが、白色の犬だけでなく、色のついた犬も載っているので、もともとは毛色が多様であったことが写真からわかります。のちのち、班の毛模様は、ドッグショーの減点となり、入賞は難しく、繁殖においても人気薄になることや、紀州名犬は全て白毛であったという話が広まったり、戦争を生き延びて最良犬に選ばれたのは、四頭いずれも白毛であったことから、白毛が大半を占めるようになったのです。本来は、毛色だけでなく、呼び名や大きさも地域ごとに様々いたようですが、天然記念物に指定され、日本犬標準にそぐわない犬は排除され、紀州犬の色なども統一されてしまいました。展覧会では評価される一方、猟師は雑種犬を珍重する傾向にあり、様々な毛色や猟技に優れた犬を復活させるという反発があらわれ、現在では血統登録される紀州犬が少なくなったのです。

この章の執筆者である志村真幸さんは“そもそも犬種というものは人間が人工的に作りだした存在にすぎない。犬にとっては(たぶん)迷惑なものでしかない(たとえば、気に入った相手が他犬種だったら仲を引き裂かれるとか。)さらに、人間にとっても不要・邪魔になれば簡単に捨て去られてしまう。紀州犬の未来ははたしてどうなるのであろうか。”と、おっしゃっています。

このままでは、紀州犬の登録犬数がゼロになってしまうことも考えられます。天然記念物制度により、犬を保護することで雑種化の危機を防いできたことは、大変意義のあることです。しかし、毛色の指定など厳格な統一化のルールによって、紀州犬や柴犬という犬種はなくなり、日本犬という犬種のみになる日も遠くないかもしれないとさえ思えてしまいます。同じ関西に住む私たちは、紀州犬の激減の実状について、ほとんど知らないのではないのでしょうか。人目線ではなく、犬目線に立って、どのようにしていくべきか考える必要があると感じます。

